

IV-476

映画の中にみる駅の駅らしさに関する研究

日本大学大学院 学生員 神森友秀
 日本大学理工学部 正 員 天野光一
 (株) オ オ バ 館 智徳

1 はじめに

現在、貨物等の移動手段、人間の移動手段として利用されている鉄道は、今後も今以上の発展が予想され、その鉄道に欠かせない駅は、人と鉄道との接点となる重要な施設であるといえる。

本研究では、人が駅をどのような物をもって駅ということを捉えているのかということを映画という映像メディアから情報を集計し、駅のシーンの特徴を見つけることを目的としたものである。

2 研究の対象

映画は世界中で作られており、その全てを対象とするのではなく、鉄道の歴史が深く映画の歴史も深い方がよいと判断し、ヨーロッパ映画を対象とした（総調査数70本・集計対象数39本）。

3 視点の在る空間と被写体の関係

駅は、列車に乗るためのホーム、列車などが存在する空間（ホーム付近）、駅に入って列車に乗るまでの駅舎に相当する空間（駅舎内）、駅の外から駅に入るまでの空間（駅の外）の3つの空間に分類し、これら3つの空間についての特徴を、以下に述べる（表-1 参照）。

表-1 視点の在る空間と被写体の関係

場	被写体	視 点 の 在 る 空 間					
		ホーム付近		駅舎内		駅の外	
		頻度	百分率	頻度	百分率	頻度	百分率
ホーム付近	特有	155	78.7	11	25.6	3	18.8
	流れ	15	7.6	1	2.3	0	0.0
	情報	20	10.2	1	2.3	0	0.0
	その他	49	24.9	1	2.3	0	0.0
駅舎内	特有	20	10.2	5	11.6	0	0.0
	流れ	10	5.1	10	5.1	4	25.0
	情報	5	2.5	10	5.1	2	12.5
	その他	1	1.0	15	34.9	2	12.5
駅の外	特有	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	流れ	0	1.0	2	4.7	5	31.3
	情報	1	0.0	0	0.0	0	0.0
	その他	8	4.1	2	4.7	8	50.0
カット数		197(100.0%)		43(100.0%)		16(100.0%)	

被写体は1カット中に複数存在する。

(1) ホーム付近

「ホーム付近」に視点が存在する場合は、「ホーム付近」にある被写体を多く撮っており、駅舎側を振り返っている例が少ない。被写体の個々の内容を見ると、「ホーム」「列車」などの駅特有の被写体が圧倒的に多い。

すなわち、「ホーム付近」では、駅であるということを表す被写体が多いといえる。また、この被写体は、固有名詞としての駅らしさも同時に表していると考えられる。

(2) 駅舎内

「駅舎内」に視点が存在する場合は、やはり「駅舎内」に存在する被写体が最も多いが、「ホーム付近」に存在するものもかなりある。しかし、ここでも振り返って駅の外側を見ることはほとんどない。被写体の個々の内容を見ると、「カート」「通路」などの人や物の流れに関係する被写体や、「時計」「標示板」などの列車の発車時刻やホームの案内などの列車に関する情報の被写体が多い。また、「天井」「窓」など駅の内装により、その駅自身の特徴を表す被写体が多く映っている。

すなわち、「駅舎内」では、「ホーム付近」の方向を見て、駅らしさを表す被写体、人や物の流れや、駅に関する情報など間接的に駅らしさを表す被写体、固有名詞としての駅らしさの特徴を表す被写体が多く映っていると考えられる。

(3) 駅の外

「駅の外」に視点が存在する場合は、「ホーム付近」「駅舎内」にある被写体も多く見られる。また、個々の内容を見ると、「階段」「通路」などの人や物の流れを表す被写体、「ロータリー」などの駅自身の固有名詞としての駅らしさを表す被写体が多い。

(4) まとめ

それぞれの空間での視線の方向を考えると、常に、「ホーム付近」の方向を見ているものが多く、外から内の視線が重要であることがわかった。

また、ここでの駅らしさとは、駅という場を示す駅らしさと、〇〇駅という固有の駅を示す駅らしさの両方とも表現されていることがわかった。前者においては駅特有のものを示すか、他の場にもあるが駅で頻出するもの（人、物の流れ、情報）を示すことによって表現している。

4 ホーム、列車を見る視点の位置と視線の方向

「ホーム付近」では、「ホーム」「列車」など、駅特有の被写体が最も多い。特に「列車」は動きもあり、駅に欠かせない被写体であるので、視点の位置と視線の方向を調べてみた。

その結果、「列車」はホームの線路よりの端部から、列車を斜めの視線で撮ることが多いことがわかった。これは、視線入射角を小さくすることにつながり、結果的に奥行を感じさせることになる。また、「ホーム」「線路」についても同様のことがいえる。

5 視点の高さと視点の在る空間の関係

3つの空間についての視点の高さと視点の在る空間の関係を表-2、視点のパターンを図-1に示す。

(1) 「ホーム付近」

「ホーム付近」では、「ホーム」「列車上部」などのように、高い位置での視点も多くみられる。これは、「ホーム付近」の空間全体を見せ、多くの駅特有の被写体を映し込むことによって、駅らしさを表現しているものと考えられる。

(2) 「駅舎内」

「駅舎内」の視点の高さは、人の目の高さが多く、視点の在る空間の種類が多い。これは、視点の在る空間が多種に渡り、空間自身が変化に富むため、高さによる変化を持た込む必要が少なかったと考えられる。また、多種の空間は、その駅の固有性も示していると考えられる。

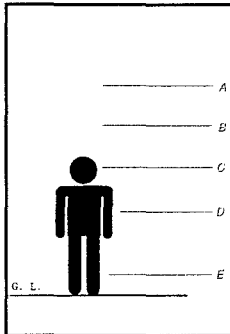


図-1 視点の高さパターン

(3) 「駅の外」

「駅の外」の視点の高さは、高い位置が人の目の高さの次に多い。また、視点の在る空間は「道路」などの駅から離れた空間であった。これは離れた場所から俯瞰することで、駅外から駅内への人や物の流れや、駅舎全貌を見せていると考えられる。

また、「レストラン」「自動車内」といった特殊な空間から、「ホーム付近」の様子を見せているものがあった。この2例の様に、特殊な空間から駅をみせることは、駅らしさを演出する有効な方法であると考えられる。

(4) まとめ

視点は高い位置に存在する場合がありますが、全貌を見渡せることが1つの駅らしさの演出方法である。

「駅舎内」のように、その駅に固有な空間に視点を置くことや、「駅の外」のように全貌を見せることは、〇〇駅であることの演出方法と考えられる。また、特殊な空間に視点を置くことは、その駅の駅らしさを印象的に演出する1つの方法であろう。

6 結論

- ① 駅だということを示す駅らしさと、固有名詞としての駅らしさの2つが表現されている。
- ② 駅だということを示す駅らしさは、駅特有の被写体によって直接的に表現される場合と、人や物の流れ、情報に関する被写体によって間接的に表現される場合があった。
- ③ 固有名詞としての駅らしさは、空間全体を見せること、駅舎全貌を見せること、駅固有の空間に視点を置くことなどで表現されていた。
- ④ 特殊な空間から駅を見せることは、より印象的に駅らしさを演出することが可能なことがわかった。

表-2 視点の在る空間と視点の高さの関係

視点	視 点 の 在 る 空 間																	計
	ホーム付近					駅 舎 内							駅 の 外					
高さ	ホーム	列車内	線路上	列車上部	駅務室	コンコース	通路	内壁	入口	動く歩道	エスカレーター	トイレ	道路	ロータリー	建物	レストラン	自動車内	
A	5	0	2	2	0	0	0	2	0	0	0	0	4	0	1	1	0	17
B	16	10	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	30
C	125	0	3	0	0	23	6	2	2	2	1	0	6	2	0	0	1	173
D	28	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31
E	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5
計	178	10	5	3	1	26	7	4	2	2	1	1	11	2	1	1	1	256